

致しなかったが臍部より MRSA が検出され、フローサイトメトリーにて NTED と診断した。NTED は Toxic chock syndrome (TSS) と異なり予後良好で後遺症を残さないとされているが、未熟児では重症例や後遺症を残す例もあり決して予後良好ではないとされている。本症例は結膜出血という TSS 類似の症状を呈した NTED 重症例という点で貴重な症例であった。

7 極低出生体重児の母親の育児負担感調査

山崎 明(新潟市民病院
新生児医療センター)

押木利英子(新潟医療福祉大学医療
技術学部理学療法学科)

極低出生体重児の母親の育児負担感調査を目的として、1988年4月より1996年3月までの間に当院新生児医療センターに入院し生存退院した、出生体重1500g未満の児の母親276人に質問紙をお送りし、214人より回答を得た。回収率は78%であった。

育児負担感としては

- 1) 子供のために自分にはプライバシーがないと感じる 25%
 - 2) 子供の世話が重荷に感じる事がある 24%
 - 3) 子供の世話でくたくたになった気がする事がある 27%
 - 4) 子供の世さに非常にストレスを感じる 30%
- 等があった。

特に注目された点は、極低出生体重児の母親の生活満足感が、健常児のみならず、過去に報告されている脳性麻痺等の一般障害児の母親よりも低いことであった。

8 JMAP(日本版ミラー幼児発達スクリーニング検査)からみた極低出生体重児の発達特徴についての検討

成田奈美子(新潟市民病院
リハビリテーション科)

山崎 明(同
新生児医療センター)

【はじめに】1500g未満で出生した幼児を対象

に JMAP を施行し、極低出生体重児(以下 LBWI)の発達の特徴について検討を行ったので報告する。

【対象】当院 NICU を退院し、未熟児外来を受診した3~6歳児のうち明らかに CP などの障害が認められる症例を除いた32名(男17女15)、平均年齢4Y11M、平均出生時在胎数週28W 2D、平均出生時体重1140g。

【結果および考察】各指標で「標準またはそれ以上」であったのは総合点で5名、基礎能力8名、協応性15名、言語性18名、非言語性17名、複合能力10名であり、87.5%でなんらかの問題を持っている可能性があることが示唆された。また Miller のパターン分類でみると、正常群4名、未熟性群5名、学習障害の可能性群6名、発達障害の危険性群3名であり、パターンに分類できない症例が15名と最多であったことから、各指標のパターンのみでなく個々の項目の反応から発達の特徴をとらえていく必要がある。

9 Hirschsprung 病に対する一期的経肛門的 Soave 変法2例の経験

新田 幸壽・大橋 祐介(新潟市民病院
小児外科)
内藤 真一
大石 昌典・永山 善久(同
坂野 忠司・山崎 明(新生児医療センター))

ヒルシュスプルング病の根治手術として当施設では従来 Duhamel-GIA 法を採用してきたが、最近 rectosigmoid type の2例(生後1ヶ月乳児)に対し一期的経肛門的 Soave 法を施行した。本法は、腸瘻造設や開腹操作を要せず経肛門的操作で行なえることより極めて低侵襲性でかつ美容的にも優れた術式である。また本法は、さほど難しい術式ではなく、確診例であれば新生児例にも可能、術後1~2病日より経口摂取可能、早期退院可能などより今後普及すると思われる。